
5 がん医療における免疫パラメーター検査導入の意義とその応用

○宇野 克明¹、細川 丈志²、上田 裕司¹、
小林 秀子¹、藤田 志津子¹、祖父尼 哲¹
(1:医療法人財団コンフォート病院)
(2:湘南鎌倉総合病院)

【目的】

治療・検査の進歩と裏腹にがんは著しい増加を示している。当施設では癌治療研究に応用される各種がん免疫パラメーターを腫瘍マーカーと併せて検討し、がん特化型の予防医学システム、「がん免疫ドック」を開発した。このシステムは、がんの早期発見はもとより各種がん治療の経過観察にも有用であると判明したのでここに報告する。

【対象・方法】

がん患者 457 名および非がん患者対照 100 名を対象として、がん免疫パラメーターであるサイトカイン (IL-12、IFN γ 、TNF α)、ナチュラルキラー細胞活性、ヘルパーT細胞内サイトカイン (Th1、Th2、Th1/Th2 比) および各種がん関連抗原 (腫瘍マーカー) 検査を実施した。

結果は多変量解析を用いて分析し、可変カットオフ理論 (V.C.S.) に基づくがん早期診断プログラムを作成、健常人を対象としたがん専門ドック (がん免疫ドック) と免疫療法における経過観察に応用した。

【成績】

上記プログラムに基づくドックでのがん判別率 (感度) は早期がん患者で 70%、進行がん患者で 95%を示し、健常人における誤判別率は 14% (特異度 86%) であった。また免疫療法においては定期検査における医療評価と治療効果に相関 ($p<0.05$) を認めた。

【結論】

がん医療における免疫パラメーターの導入はがんの早期発見および治療に有用であると考えられる。